むすび塾

防災・減災対策の課題
学校や町との連携重要

巡回ワークショップ　@宮城・丸森町金山地区

東日本大震災の教訓を今後の備えに生かすため、河北新報社は1月21日、巡回ワークショップ「むすび塾」を宮城県丸森町の金山まちづくりセンターで開いた。東北以外の開催も含めて通算28回目。減災・復興支援機構（東京）のメンバー10人が、地域の防災・減災対策の課題について意見交換したほか、避難所開設と運営の図上訓練に取り組んだ。

地域の備えの現状と課題について話し合う住民たち。避難所開設・運営の図上訓練では、事前準備の大切さを学んだ

金山地区では近年、住民の暮らしに影響が出るような自然災害がなかった。東日本大震災で町は震度5強の揺れに襲われ、水道と電気が止まった。いずれも1～2日後に回復したが、参加者は「トイレが使えなくて困った」「電気を使わない暮らしが必要だ」などの大切さを再認識した。

集まったメンバーの家庭では、震災をきっかけに食料を備蓄し、いずれも3～4日分を確保していた。自宅の菜園や井戸水などを活用すれば、1カ月以上生活できるという参加者もいた。

地域は路線バスの本数が少ないため、買い物や病院通いなどで車は欠かせない。「ガソリンが手に入りづらかった」と、口をそろえた。

木村理事長は、2004年10月に発生した新潟県中越地震では、都市部の住民の多くは避難所に駆け込んだのに対し、農村部は住民が自立して生活をしていたことを説明。「地元にいると気付かないかもしれない」が、金山には家にコメ、畑に野菜、倉庫に大豆があり、井戸もある、備えに役立つ資源が豊富だ。大災害の発生時には、外部からの支援に頼らない対策ができるだろう」と話した。

隣接する金山小の校舎の図面を使って、避難所開設のシミュレーション構の宮下加奈専務理事も行った。参加者は図面を囲んで、運営者は「草刈りやガラス製品のような危険物がある家部や居住空間などの振り分け作業に取り掛かった。本部として使うことで、一般の人の入室を避けられる」などと教室の使か配置が決まらなかった。参加者からは「学校、町とともに、普段から防災・減災について話し合ってほしい。教室の使い方は時間がたつと変化するので、見直しも必要だ」と呼び掛けた。

校舎の利用系が決まると、減災・復興支援機構は、

三方が山、自然災害は少なく

宮城県丸森町金山地区は、町東部の盆地にある。北に阿武隈川が流れ、東にお館山（117.5㍍）南に鬼形山（194.5㍍）西に小富士山（190.2㍍）と三方を山に囲まれている。2014年1月末現在、398世帯1124人が暮らしている。

かつては養蚕業で栄えた。いまは水田が広がるが、専業の稲作農家は少なく、第2種兼業農家がほとんど。金山工業団地の誘致企業に勤める住民も多い。

歴史的に水と緑に囲まれ、土地が肥えた地域で、約6000～7000年前の縄文前期から人々が竪穴住居を造り、暮らしていたことが確認されている。1576～84年の伊達藩と相馬藩の戦いでは、伊達政宗初陣の舞台となった。

1958年9月に台風22号が通過した際は、地区の河川に堤防がなかったため、床上浸水の被害を受けた。その後、河川の改修や築堤工事などが行われ、1986年8月の豪雨では、大きな被害はなかった。

■むすび塾に参加して――宮城・丸森町金山地区

【災害への備え】一番心配なのは、情報が入ってこないことと、家族と連絡が取れないことだ。緊急時にどのような行動を取るのか、家族で話し合い、共有しておきたい。

＝金山地区自主防災会避難所開設運営部長・佐藤隆さん（63）

【災害時の不安】農家をしており、食料は間題ない。ガソリンは備蓄しておくことができないので、燃料不足が不安だ。ライフラインが止まったときの対策を考えておかなければいない。

＝行政区長・菅野正義さん（64）

【災害への備え】1カ月分の食料を蓄え、停電になっても暖を取れるよう灯油ストーブを用意している。昔の生活を知る私たちの世代は非常時に強いと思うが、若者は大丈夫だろうか。

＝行政区長・斎藤次雄さん（65）

【災害時の不安】私が住む地区は高齢率が54・4％と高い。平日の日中は若手がいないため、迅速な避難や誘導に心配がある。自主防災会の備品が十分な点も不安だ。

＝行政区長・佐藤泰雄さん（70）

【参加して】災害が起きたら、自主防災会が避難所の運営などに当たらなければいけない。重い責任を背負わられた。むすび塾の参加者を中心に、意識を高めて体制づくりを進めたい。

＝金山地区自主防災会本部長・板橋茂さん（63）